

<書評と紹介> 青森市史編集委員会編 『新青森市史 通史編 第一巻 原始・古代・中世』 を読んで

八木, 光則 / YAGI, Mitsunori

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

76

(開始ページ / Start Page)

48

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2011-09-30

〈書評と紹介〉

青森市史編集委員会 編

『新青森市史 通史編 第一巻』

原始・古代・中世』を読んで

八木 光則

はじめに

このたび待望の『新青森市史』の通史編第一巻が二〇一一年三月青森市から刊行された。これまで資料編が考古・現代八巻、別編として教育・民俗・自然五巻が一九九八年から刊行され、今回通史編の最初の巻として、原始・古代・中世編が刊行されたわけである。今後も継続して刊行が予定されている。

通史編第一巻は旧石器時代から近世初期までを扱った七五八ページに及ぶ大部である。執筆は青森県在住あるいはゆかりのある考古学、古代史、中世史、宗教史研究者一二名で、校閲は法政大学（元弘前大学）教授小口雅史氏である。

本巻の構成は時代順に次のような三部構成となっている。

第Ⅰ部 原始時代のおもり

第Ⅱ部 古代の外浜世界

第Ⅲ部 躍動する中世の外浜

以下、記述にしたがって内容の概略を紹介するとともに、若干の私見を加えさせていただきたい。

一 原始の記述

第Ⅰ部では旧石器時代から弥生時代が扱われている。まず「第一章 旧石器時代のおもり」では旧石器時代の気候や火山灰、動植物層の環境を概説し、青森県内の旧石器時代の遺跡を紹介する。代表的な遺跡として八戸市田向冷水遺跡などが取り上げられているが、この時代の遺跡は少なく、当時の人々の生活や社会を復元することは至難である。ほとんど石器だけの出土で歴史叙述がなかなかできにくい時代であり、より広い地域からのアプローチが必要なのかも知れない。

土器出現期の資料として、日本で最古の土器といわれる外ヶ浜町大平山元Ⅰ遺跡の石器と無文土器が紹介される。旧石器最末期への石器群の位置づけと理化学的な年代測定から最古段階と認定されるまでの経緯を述べるとともに、この段階で土器と石鏃が登場することから食生活と狩猟の大きな変化があったことが説明される。

そして土器と石鏃の定型化が進む六ヶ所村表館（Ⅰ）遺跡以降の時期を縄文時代の開始ととらえる。草創期の資料として青森県内出土の土器が年代順に紹介され、着実に資料が増えてきていることがわかり、県外の者にも大変参考になる。

次に章を変えた「第二章 縄文時代のおもり」では縄文時代早期や前期初頭の尖底土器文化の代表的遺跡、遺構、遺物が挙げ

られ、縄文時代の基盤が作られた様子が述べられる。石器の種類が増し、土偶や装身具が登場したことや、遺跡の少ない津軽でも「堅穴住居が確認されていることなどである。また動植物の利用とあわせ狩猟の陥し穴や沿岸での網漁についても触れられている。

縄文時代前期中葉～中期は、円筒土器の時代＝円筒土器文化として三内丸山遺跡を中心に語られる。江戸時代から近年までの調査歴と一九九四年の保存決定について述べ、遺構、遺物の概略が紹介される。八〇〇棟に及ぶ堅穴住居跡、高床倉庫と想定される掘立柱建物跡、巨大な六本柱建物跡、六〇〇基以上の成人用の土壙墓、約八八〇基の乳幼児用の土器棺（埋設土器）、道路状遺構、盛り土（土砂や土器などの廃棄場）などの遺構群である。それらの場の使い分けを六期変遷でとらえた二〇〇二年刊行の『青森県史 別編三内丸山遺跡』の図も引用されている。そして膨大な土器、石器、骨角器、土偶などの土製品、石製品のほか泥炭層からの貝類、魚類、鳥類、ほ乳類、植物など多様な食糧資源が列挙され、ヒスイ、黒曜石、琥珀、天然アスファルトなどの広域交流品についても述べられている。三内丸山遺跡の豊富な遺構遺物をあらためて感じさせてくれる内容となっている。

縄文時代後期は十腰内文化としてさまざまな文化要素が取り上げられる。石造記念物（環状列石）として青森市小牧野、稲山（一）の両遺跡とが北海道森町（せたな町と誤記）鷲ノ木遺跡から岩手県滝沢村湯舟遺跡までが紹介される。環状列石以外の墓として土壙墓、土器棺墓、組石石棺墓などの事例も多く取り上げられている。このほか集落との全景がわかる例として掘立柱建物跡三五

棟が環状に配される上野尻遺跡、近年類例が増えている水場遺構の三内丸山（6）遺跡が挙げられており、注目される。さらに十腰内文化の特徴的な遺物として狩猟文土器、三角形岩版に注目し、また豊富な土製品、石製品についても県内各地の事例が紹介されている。

縄文時代晩期の亀ヶ岡文化は、集落が小規模であったこと、多数の土壙墓が確認されていること、沿岸部では貝塚が形成され、製塩土器によって製塩が行われたことなどの特徴をもつことが挙げられている。また豊富な遮光器土偶や呪術祭祀遺物、装身具、さらには大陸との関係を窺わせる三足土器、玉象嵌土製品なども紹介されている。

次に章をあらためて、「第三章 弥生時代のあおり」が展開される。遠賀川系土器（近年では東北地方のそれらは類遠賀川系土器と呼ばれることが多い）や大陸系石器の一つである柱状片刃石斧など弥生的要素の流入や、田舎館村垂柳、弘前市砂沢遺跡の灌漑型水稲耕作の様子が明らかにされている。コメだけでなくアワ、ヒエなどの炭化穀類の出土と畑作について触れるとともに、縄文時代以来の狩猟採集も重要な生業であったことを述べる。そして水田稲作は洪水や寒冷化により途絶したことが書かれる。

墓について青森県内各地の土壙墓や土器棺墓の副葬品に北海道や新潟との交流を示す遺物が入っていることから、ムラの指導的立場にあった者やシャーマンのような人物の存在を想定している。なお平川市五輪野遺跡出土の土器棺は類遠賀川系土器と在地の縄文色の強い土器とが上下に組み合わさっており、土器棺は岩

手県二戸市金田一川遺跡や秋田市地蔵田B遺跡での類例ともあわせ、出自の異なる土器を使った葬送は注目される。

また北海道の縄文時代の恵山文化と共通する恵山式酷似の土器や石鈿、靴型石器、魚形石器、さらには北海道産の黒曜石製石鏃、人形石偶、クマ意匠の遺物など、津軽海峡をはさんだ密接な交流についても述べられており、興味深い内容となっている。

以上、第I部の旧石器・弥生時代の記述を概観してきた。全編の特徴として記述がきわめて抑制的であり、事実の列挙に中心がおかれていることが挙げられる。それによってそれぞれの考古資料の出土遺跡が一目でわかるという大きな恩恵がある。これは青森市内だけでなく県内の状況に筆者らが精通していたからこそ為しえたことと高く評価される。

一方そのことが、青森市民だけでなく広く読まれる歴史叙述としては、少し物足りなさも感じさせる。気づいた点を三点取り上げた。一点目として、「文化」の扱いである。尖底土器文化、円筒土器文化、十腰内文化、亀ヶ岡文化の様相がより詳細に記述されているが、これらは青森の縄文時代を特徴づける時期のものであり、強調的に取り扱われることもよくわかる。ただここでいう「文化」は日本考古学が古くから慣習的に使ってきた土器型式の区分による文化である。土器型式から発展させてその時間的空間的な定義、あるいは文化の変化の要因や連続性に言及しても良かったのではないだろうか。

たとえば円筒土器文化は円筒下層a～上層e式土器の時期の文化をいい、十腰内文化は十腰内I～V式を使用していた時期の文

化で、その間を埋めるものとして中期後葉の「大木系土器文化」や後期前葉の「前十腰内文化」が設定されている。円筒土器文化や十腰内文化についてはその構成要素についての記述はあるが、その間を埋める文化の諸要素の説明がなく、代表的な文化がどうして変化するのかほとんど語られない。円筒上層式土器の時期は帯状集落を形成し後期には環状集落へ変遷するが、環状集落は中期大木式土器分布圏以南で通有の集落形態であり、円筒上層e式の後に大木式系の土器に変化することと無関係ではあるまい。そこには三内丸山の世界観の転換、イデオロギーの転換ともいえるべき画期が存在していたと考えられる。歴史を学ぶおもしろみは変換期にこそあると考えているのは評者だけであろうか。

二点目は各時期の比較があまりないことである。それぞれの時期の遺構や遺物が紹介されるが、各期の特徴は読者が前後の時期と比較して読み取るしかない記述となっている。たとえば土偶の変遷で中期の板状土偶から後期の写実的土偶への変化があるが、ほとんど説明されていない。比較がないため何が変わって何が踏襲されるのかがぼやけているのである。

三点目として、三内丸山遺跡に対する評価である。この遺跡は保存決定前後にマスメディアによって全国的に大きく取り上げられ、地域に強い誇りをもつ津軽人気質や地元への熱意とが合わさって保存決定されたことは周知の通りである。一九七二年の高松塚古墳の報道以来マスメディアの埋蔵文化財への関心は高まり、過熱気味の報道（その帰結点の一つが前期旧石器捏造事件）は三内丸山遺跡の過大評価を誘発し、「縄文都市」などの言葉が生まれた

りした。また集落変遷などについても個別の遺構分析のデータや総括が提示されることなく、結論だけが一人歩きしている風潮もみられた。それに対し冷静な分析から遺跡の理解を進めようとする立場の研究者も少なくなかった。日本の代表的遺跡あるいは縄文の代名詞ともなった三内丸山遺跡について、その保存前後の動きを総括することもこの遺跡の理解と評価に大きくつながるのではないだろうか。

二 古代の記述

「第一章 空白のエミシ時代」では、まず古墳時代の東北南部以南と北部の対比が行われる。四～五世紀の東北北部ではヤマト王権を頂点とする古墳が築造されず、北海道「続縄文」後半期の土器の分布がみられるが、一方で古墳文化との交流を示す石製模造品や土師器、須恵器も流入していた。この時期は閉鎖的ではなく開放的に流動した社会と評価されるゆえんである。六世紀になって仙台平野周辺での古墳の衰退と国造制地域からの除外が進み、七世紀に末期古墳が岩手県や青森県東部で展開したことが述べられる。

そしてエミシについて、中国側の史料や『日本書紀』などの表現からヤマト王権が小中華主義にもとづいて「蝦夷」と表記するようになったと解説される。七世紀半ばの斉明朝に津軽エミシが登場、阿倍比羅夫の北征の経緯とともに『書紀』に記載される地名の比定も行われ、渡嶋や後方羊蹄は津軽寄りの解釈が示されている。

書評と紹介

次の「第二章 大開発時代」では八世紀後半以降、一転して津軽で堅穴住居が次第にみえ始め、九世紀後半以降に増加することが豊富な史料をもとに描かれる。この時期の土器製作の動きとして轆轤技術の導入やタタキ調整の轆轤成形平底甕（底部砲弾形の出羽型甕は津軽ではみられないとされるが、弘前市境関館遺跡出土例がある）、口縁部に多状沈線をめぐらす甕の出現が挙げられている。土器の変化に注目するのは単に器が変わることだけでなく、技術導入の契機となったできごとや製作者の移動、交流など社会の変化を反映したものであることが多いからであるが、そのあたりにも言及してほしかった。

一〇世紀前半に降灰した十和田a火山灰（九一五年）と白頭山火山灰（九三七・九三八年）の前後に集落がさらに増えるが、その様子が青森市浪岡地区の野尻遺跡群、青森平野南東部、北西部、東部ごとに紹介されており、各地域の様相がよくわかる。

生業の展開として、農耕、漁撈、馬産、狩猟採集、木工・杣、製鉄、土器生産、鉄生産の様相がそれぞれ数多くの遺跡や遺構、遺物から語られている。詳細は省くが、このような人口の急増と生業の大きな展開が「大開発時代」といわれるゆえんであろう。

南北双方からの交流についても整理され、八世紀には須恵器、刀子、玉などが南からもたらされ、その流入ルートとして出羽や陸奥からの内陸部ルート、日本海沿岸を飛び石状に伝う日本海沿岸ルートが想定されている。九世紀になると南から轆轤成形の土師器、須恵器、出羽型甕、墨書土器、石帯、銅鏡、銅鏡、横櫛、律令的祭祀遺物などが流入するようになる。

北からは一〇世紀中葉以降北海道に主体をおく擦文土器が増加する。この擦文土器を全体的にまとめ、時期ごとの地域性を明らかにした上で、その流入経路として太平洋・陸奥湾沿岸ルートと日本海沿岸・岩木川ルートを想定する。前者は道央・道北部と連携し、後者は道南西部と結びついていたとされる。擦文土器の出土は、鉄を中心とした生産物を北海道に、昆布、鮭、鷹や鷺の羽、獣皮類が北海道から輸入した海峡交易の結果としている。なお陸奥湾岸・岩木川両地域と同じ交易品であったのか、また地域性が生じた理由が何だったのか説明がなぐや物足りない。擦文土器の製作者については土器自体が渡来、北奥に住んでいた擦文(糸)文化の人々の製作、交易滞在の擦文文化の人々が北奥で製作した可能性を指摘している。

史料からみた坂上田村麻呂伝説や元慶の乱も津軽との関わりで取り上げられ、いくつかの新しい解釈も行われている。前者は津軽の著名な祭りであるねぶた・ねぶたと深く関わり、青森市民にとっても関心の高い田村麻呂伝説である。延暦一五年や大同二年といった寺社の建立年代が田村麻呂の陸奥守兼鎮守將軍補任や清水寺への寢殿寄進と関連があることを指摘する。また東北にとつて征服者である田村麻呂が英雄として扱われる理由として、エミシ・アイヌ説により自らはエミシの子孫ではないとの認識が背景にあったと解釈する。長年培われてきた日本民族単一説とも合わせて考えてみると、興味深い指摘である。

九世紀後半に秋田城を中心に起きた元慶の乱について、その経緯とともに津軽エミシの関わりが整理されている。津軽エミシは

強固な部族連合を形成せず、官軍側と反官軍側と異なるそれぞれの立場で関わっていたこと、出羽国内から苛政に苦しんで津軽などの奥地へ三分の一が逃亡したことが挙げられている。

この章の最後としていわれる防御性(区画)集落が詳述される。一〇世紀の半ば以降、青森県などで土器や建物などに独自性が出始め、防御性集落が出現するようになるが、このことと自らの利益確保を重視する中央貴族が北奥に関心をもち始めたこととも関連させる。そしてこの種の遺跡の調査研究史(一八九〇から一九九六年まで)や北海道のチャシ分類を準用した集落の分類が行われる。これまで集落の一部を区画する上北型、全体を区画する津軽型という分類が研究者の間ではよく知られているが、その違いの要因として馬産と米作という生業の違いから階層差の開きに差があった可能性を指摘している。

集落の防御性について、弥生時代や中世にみられる戦争の特徴(武器、戦士の墓、武器の崇拜)が北奥では稀薄であることから、一部研究者が提示している「戦争の時代」は否定されるということ。かつて北方世界との交流による軋轢によるとの考えを明らかにしている。軋轢は北奥の集落と受領国司との間、あるいは集落相互におこったとされるが、交易が盛んになることと軋轢が激化するこの因果関係についても少し説明がほしい。なおこの前後の記述に「北方世界から都への貢納物」や「地元の豪族を登用しての奥郡支配」とあるが、北方世界が直接都へ貢納したのか、また豪族登用がどのような形だったのか、示されていない点も気になる。

防御性集落は一〇世紀中葉に出現し、一一世紀代のうちに終焉を迎えたとされる。その要因として前九年・延久蝦夷・後三年合戦を経て、陸奥守藤原基頼（在任一一〇三～一一一二年頃）と藤原清衡によって「奥州の真の平和」がもたらされ、それが防御性集落を消滅させたとする。防御性集落の終焉年代や津軽の建郡時期とも関わりがあつて、今後もまた議論が続けられるであろう。

「第三章 古代のモノ・ココロ・動き」では、墨書・刻書土器や祭祀遺物が整理され記述されている。墨書の中では特に「夷」字に似る「人」と「三」が合わさつたような文字を取り上げ、「奉」などの省略形とする平川南氏の説を支持している。祭祀遺物では九世紀の土馬や吉祥文字、青森市新田（一）・（二）遺跡の一〇〇～一一世紀の物忌み札、斎串、形代、仏像部品、各地の密教法具や錫杖状鉄製品などの出土状況が説明されている。それらのまとめとして、青森県内では仏教、陰陽道、神道的な要素が並存した神仏習合の状況が想定されている。また日本海の島嶼を中継する地域間交流が活発に行われ、日本海沿岸地域に独特の文化や風土をつくり出されたことも概観されている。

第Ⅱ部全体を通してみると、歴史叙述として各種史料や考古資料の積極的解釈を行っており、第Ⅰ部とは趣を異にする。また蝦夷全般にわたる記述もあり、全体像の中で青森の蝦夷社会を理解させようとする意図がはつきりしている。節によっては文章表現の難易度に差があり読者層の設定が執筆者によって異なっているものの、主要遺跡を網羅し、いわば古代青森の事典ともなっており、活用が大いに望める内容となっている。

書評と紹介

そういった中でやや気になった点に触れたい。第Ⅱ部は蝦夷が中心の記述になっているのであるが、その蝦夷のとらえ方にやや疑問が残る。章によって「エミシ」と「蝦夷」が使い分けられているが、その違いの説明がないため読者は混乱するのではないだろうか。

また第一章ではその表題から四世紀の「統縄文」後半期以降の東北北部の住民も「エミシ」ととらえていると解され、第二章でも古墳時代併行期以降の社会を「蝦夷」社会とする（三七三頁）。これは蝦夷の登場を四世紀とする新しい見解である。蝦夷概念が確定するのは六世紀後葉であるが、それ以前の人々を蝦夷（＝エミシ）と呼んで良いものか。仮に東北北部で独自の文化を有していたとして四世紀から「蝦夷」あるいは「エミシ」と呼んだ場合、四世紀に大形前方後円墳を築造していた仙台平野では六世紀に蝦夷国境が策定されるので、蝦夷（あるいは概念）は北から南下したことになってしまう。これまでの蝦夷研究の成果と大きく異なるので、その説明が必要であろう。

次に北緯四〇度論である。九世紀初頭に蝦夷集団の住む領域が北緯四〇度以北に固定されたとあるが、北上盆地や秋田平野、横手盆地などの住民は公民化し、蝦夷とは呼ばれなくなつたかのよう受け取れる。その後も一世紀半にわたつて秋田城・胆沢城・扨田といった城柵が存置されるのは公民化しない蝦夷を支配するために必要な施設、組織であつたからであり、北緯四〇度は蝦夷と国家側の境界線とはなっていない。

北緯四〇度論は富樫泰時氏の旧石器時代から古代まで続く東北

北部の文化境界線論を嚆矢とする(富樫一九七四「円筒土器分布圏が示すもの」『北奥古代文化』第六号)。これについては、地域差が生じた原因を時代ごとに検証せずに歴史の時代区分を固定化して解釈される危険性、北緯四〇度を越えた文化の動態が過小評価される危険性、さらに地域差が一本の線で画されるものではなく接壤地帯はモザイク状やグラデーション状の様相を呈するのが一般的であることを指摘したことがある(拙稿二〇〇六「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『北の防衛性集落と激動の時代』同成社)。

三 中世の記述

中世編は奥六郡安倍氏の時代から江戸時代初期の青森港開港までが扱われる。「第一章 平泉・鎌倉世界の北上と在地勢力の拡大」では、安倍氏の性格と前九年合戦の経緯が描写される。安倍氏は北の世界の保護者でなく、鎮守府在庁として軍事貴族との姻戚関係を結び、在地支配を強めていったと解釈する。安倍富忠についても安倍氏の族制結合の一員と位置づけている。

延久北奥蝦夷合戦、後三年合戦を経て藤原清衡が平泉に本拠を定めるが、この間に青森県域に津軽などの郡制が施行される。それらが陸奥国へ属することについて、海路ではなく南の陸上交通路にしたがって延久合戦の兵が進み、それに伴って大量の移民も行われたためとしている。その時期は後三年合戦前の清原真衡の一世紀後半あるいは北奥の新体制を築いていった藤原清衡の一世紀初めの二説を紹介し、結論は防衛性集落の終末と合わせ

て考えるべきとしている。

文治五年の奥州合戦では津軽安藤氏の同族と思われる人物の活躍によって平泉藤原氏も源頼朝軍によって滅亡させられるが、藤原氏は白河から外浜までの奥大道を整備していた。北奥の道筋の遺跡として秋田県大館市矢立廃寺(居館の機能も想定)から青森県平川市古館遺跡(一一世紀)を経て大鰐町伝高伯寺跡に至る。そこから東西ルートが分岐し、東の乳井通り沿いには八幡館遺跡、大光寺城・大光寺新城、浪岡城など一二世紀の遺構遺物が確認される遺跡が並ぶ。西側ルートは弘前市堂ヶ平経塚から中崎館などの遺跡を結ぶルートで、東西ルートは浪岡城で合流し、外浜に入ると想定される。奥大道の具体的な通過地点を遺跡から想定したもので、興味深い。

鎌倉時代に入り、奥羽両国に郡の地頭がおかれ、鎌倉後期には津軽平賀・田舎・鼻和・山辺郡は北条得宗領となり、曾我・工藤・横溝氏などの地頭代の名が梵鐘銘や板碑にみえる。外浜は土着の豪族安藤氏の所領とみられている。この外浜が中世において東の境界として怪異の出現、追放する場とみられていたことや犯罪者や穢れの追放する境界と位置づけられていたことなどが解説される。

津軽安藤氏の自己認識について、他の中世豪族と異なり、蝦夷を支配するものは蝦夷であるという蝦夷系譜と、北奥の覇者である安倍氏に連なる安倍氏系譜という二つの系譜を同時にもっていた。それは自らの北方世界ないし蝦夷支配のよりどころとするためという。安藤氏の地位を示す「蝦夷管領」(本来は北条得宗家の

任で、安藤氏は代官。その前段階は「東夷成敗権」をもつ鎌倉の(將軍の現地執行者として安藤氏が位置づけられていた)は二つの系譜を根拠に独占されていたとする。

安藤氏の所領は北条得宗家の被官として津軽鼻和郡、西浜、下北半島一帯にあったが、安藤氏は山の民、海の民であり、また蝦夷管領代官として夷島産品を確保する大規模な交易活動を行っていたことが述べられる。ここに安藤氏が他の地頭代官とくらべ際だって特異であることが強調されている。

文永五年(一二六八)に大規模な蝦夷叛乱、元応二年(一二三〇)(元享二年(一二三二))の安藤氏の嫡庶をめぐる大きな内紛(津軽の大乱)が起きる。嘉暦三年(一二二八)になってようやく和談となるが、鎌倉幕府滅亡の一因にこの大乱が影響したとされる。

近年発掘調査が行われた外浜の石江遺跡群では、古代の遺構遺物も豊富であるが、一二世紀後半～一六世紀の中世の建物跡なども確認され、一三世紀までの拠点的性格、一四世紀以降に小規模化したことが明らかにされている。史料と遺跡の相関が読み取れそうである。ただし遺構配置図などがわかりにくく、各期の様相が読者によく伝わっていないのが惜しまれる。

「第二章 南北朝から室町時代へ」は、南北朝期の津軽曾我氏を中心に工藤氏、南部氏らの動静が描かれる。最終的には南部氏の津軽制覇と曾我氏らの滅亡に向かう流れを追うこととなる。

安藤氏は、北条氏が滅び足利尊氏や北畠顕家が鎮守府將軍になって蝦夷沙汰権がうつつても、継続してその代官職を確保し続けた。安藤氏の拠点である十三湊は発掘調査によれば一三世紀初めに町

並みが成立していたことが確認されている。同じ五所川原市山王坊遺跡が一三世紀末からということ、十三湊も古くから運営されていた可能性も指摘している。十三湊は全国三津七湊の最北に位置し、北日本世界のターミナルとして重要な役割を果たしており、安藤氏は古くからその湊を掌握していたとされる。

応永二年(一三九五)には秋田に安藤氏から分かれた湊家が成立し、十三湊の下国安藤氏とともに二系統の蝦夷管領が存在することとなる。下国安藤氏は「日本将軍」との呼称が冠せられるようになり、十三湊の繁栄ぶりがよく述べられている。

明応年間、戦国時代が始まると北奥は十三湊の下国安藤氏、秋田の湊安藤氏、浪岡北畠氏、三戸南部氏の四大勢力が覇を競うようになる。特に南部氏は津軽・秋田方面への進出に伴い、下国・湊安藤氏と激しく戦うこととなる。そして下国安藤氏の北海道への退転、奥羽への復帰、下国惣領家の滅亡、一族の檜山城(米代川下流域)築城といった安藤氏の変転が解説される。そのような節目には南部氏と安藤氏の干渉勢力として浪岡北畠氏があり、大きな存在であったと推定している。安藤氏のいなくなった十三湊は砂の堆積で湊としての機能を失いつつあり、他の湊の発展もあつて、かつての繁栄も失われていくこととなる。

本章の最後に、青森市域の中世遺跡がいくつかの遺跡群として紹介されている。

「第三章 乱世の外浜」は南部氏一族の津軽への進出から始められる。延徳三年(一四九一)のちに津軽氏の遠祖となる南部光信の西浜種里への進出、明応七年(一四九八)南部光康(堤弾正)

の現在の青森市街地にあたる外浜堤浦への入部である。それらの諸伝から堤浦の港湾や町場の形成が一六世紀以降であったと想定している。その拠点として堤氏の横内城が外浜の押さえとして重要であったことが述べられる。埋蔵銭(備蓋銭)が外浜で一〇例以上が確認されている事例も紹介されている。

中世の外浜は陸奥湾最奥部に境に東の外浜、西の北浜に分かれており、外浜は堤浦(包宿)や横内を中核に南部氏が支配し、北浜は浪岡氏の傘下におかれていたこととされる。浪岡氏の系図的検討も為されている。

北浜の大きな拠点として油川も大きく取り上げられる。中世奥大道の終着点であると同時に夷島渡航の出発点であった国境の町であった油川は、その重要性ゆえ大浦為信が手中におさめようとしたとしている。油川は商人の町として浄土真宗寺院などが建てられた都市部と一・六km離れた油川城の二元構造からなる。油川城は広々とした単郭の城で、交易で訪れた蝦夷に対する儀礼の場であったと考察する。

そして大浦為信の出自や施政を紹介しながら、津軽に基盤を確立するまでの様子が詳細に述べられる。年代には諸説あるようであるが、南部氏との抗争を繰り返しながら、浪岡北畠氏を滅亡させ、最終的な津軽独立に大きく踏み出したのは天正一五年(一五八七)であったとする。同一八年には豊臣秀吉から津軽の領知を安堵され、慶長八年(一六〇三)には高岡城(弘前城)築城を開始することとなる。寛永初年の青森開港についても史料解釈が行われている。

最後に外浜の古代(中世)の宗教世界が概観される。その中で田村麻呂の蝦夷征討は開拓と開教が一体的に行われていたとする。また田村麻呂とともに九世紀後半の円仁による天台宗の開教、伝道によって、外浜の蝦夷が「夷」意識を附着させられた「着夷」から「夷」意識が払拭された「脱夷」に向かうという新たな宗教的解釈も提起されている。

鎌倉時代になると、臨済禅と真言密教による「禪密体制」を北条氏が推し進め、安藤氏もその実践が求められ、寺院を天台宗から真言宗に改宗させたとする。それが宗教的トラブルを引き起こし、文永五年(一二六八)の蝦夷の反乱へつながったとする。

以上、中世を概観してきたが、評者は中世の門外漢であり、それらの記述には一言一句教えられることばかりで、安藤氏や津軽氏の動きを十分に知ることができた。その中で若干気づいた点を述べたい。まず大浦(のち津軽)為信が反乱者(六二六頁)、侵入者(六二九頁)ととらえられていることである。近世には津軽氏の領内であった青森市の市史としてこの表現は一種驚きであるが、それはさておき、一方に与する表現は近年の歴史学では避けられることが多い。いうまでもなく反乱や侵入は史書が残されている側の一方的な見方を示し、あるいは現代では当たり前の平和主義からの見方であったりする。

また南部氏の扱いで、津軽に古くから展開する南部氏が三戸南部氏として描かれていることである。三戸南部氏の台頭時期については諸説あり、近年では戦国期など比較的新しい時期からの台頭がいわれることが多くなっている。発掘調査からも根城(八戸)

南部氏の勢力が三戸南部氏を凌駕していることはもつと評価されたいだろう。

さらに、外浜の宗教世界のうち古代における解釈はきわめて斬新であるが、方法論的には違和感がある。古代国家が蝦夷の地への侵入と仏教や神道の北進とが不可分であることはある程度理解できるものの、「伝説も歴史のうち」として、寺社の創建年代や創建者について寺伝等を未検証のまま採用している。考古学的資料からは八世紀末～九世紀初頭の仏教的徴証は田村麻呂が「征討」対象とした地域にはみられないこと、そのほるか北に位置する外浜では蝦夷集落そのものが稀薄であること、九世紀後半～一〇世紀の北奥では錫杖状鉄製品や耳皿、祭祀遺物など、内国の仏教、神道とはかなり変形した形で入ってきていることも本書で述べられている通りである。

ただ筆者が言わんとするところは史実の如何ではなく、伝説を含めた中から古代蝦夷社会の宗教観を理解し、あるいは宗教による「脱夷」の効能を論証しようとするところにあるのだろう。所論が広く受け入れられるためには、歴史学や考古学的手法との突き合わせ作業が課題である。

全体を通してみて、考古資料や系図などの史料の取り上げ方が歴史叙述の中でどう位置づけられるのかよくわからない箇所が見された。特に評者が考古学を専らにしているため厳しい見方になるのかも知れないが、すぐれた素材である考古資料が歴史を語る段階までの肉付けが為されていないところも少なくない。

また、考古学関係の参考・引用文献が極端に少ないことがある。

書評と紹介

随所で先行研究や異説を紹介し、また明らかに先行研究に依拠あるいは既発表論文と同じ論点の記述がみられるが、その出典が巻末の文献一覧にない。紙数の関係や煩雑さを避けるために割愛したのであるが、当該期の研究者でなければたどり着くことのできない文献であり、通史とはいえ出典を明らかにすべきではなかつたらうか。

おわりに

拙文は、書評というには一方的過ぎる評価が目立つ文章となつてしまった。限られた時間の中より多くのことを伝えたいと奮闘して書き上げられたものであることは随所に感じられる。そういった各執筆者がこだわったであろう記述や書評で取り上げるべき新たな論点を理解せずに、枝葉末節の評になつたことは評者の学の浅さによるもので、ご寛恕をお願いしたい。

最後に、本書の多くのすぐれた点のうちいくつかを記して、拙文を閉じさせていただきたい。まず自治体史の刊行を継続事業として進めていることへ敬意を表したい。評者の住む岩手県や盛岡市では数十年前に自治体史が編まれたが、発掘調査資料の膨大な蓄積、史料の新発見や閲覧可能化により基礎資料が大幅に増えているにもかかわらず、一向に旧稿をあらためる気運はなく、古い記述に甘んじなければならぬ状況である。その意味からも青森市はじめ自治体史の編纂が行われていることは羨望でさえある。

また最新の知見が集成されていることの意義は大きい。既に資料編で多くは収録されているが、本巻で青森市内はもちろん県内

の考古資料や文献史料がその意義を付与されて叙述されている。それにより市民はじめ県外など多くの人が個々の資料の重要性を認識することとなり、文化財保護にも大きく役立つことと思われる。

そして青森市を中心にした各時代の特徴が明確になり、青森の歴史的风土を考える上での基本資料ができあがったことである。青森の歴史の特徴が明らかにされたことで、他地域との比較も可能になり、「青森とは何か」を問うとき、必携の書となることは間違いない。

地域の歴史を体系的にまとめられた本巻はこれから数十年、青森市やその周辺の歴史バイブルとして多くの読者に読みつがれていくことであろう。

(二〇一二年三月刊 A5判 七五八頁+付図 頒布価格六九三〇円 青森市)